

特集：座談会

伊地知 可奈  IJICHI KANA (東京都練馬区立八坂中学校)	根岸 雅史  NEGISHI MASASHI (東京外国語大学)	室井 美稚子  MUROI MICHIKO (清泉女学院大学)	山本 崇雄  YAMAMOTO TAKAO (東京都立両国高等学校附属中学校)	高橋 貞雄 《司会》  TAKAHASHI SADA O (玉川大学)
---	---	--	---	--

新しい時代の教科書本文を模索する

高橋 ご存じのように、新しい学習指導要領の内容がほぼ明らかになってきており、英語が各学年で週4時間体制になることや、「基礎と発展」「ことばと体験」「習得・活用・探求」などのキーワードが各方面で取りあげられています。この座談会では、新学習指導要領の内容も考慮に入れながら、テーマである「教科書本文」について考察を深めること

本文をどう使っているか

高橋 まずはじめに、授業の中で本文がどのように扱われているのか、その現状について、実際に中学校の教壇に立つ先生方からお伺いします。

伊地知 現在中学3年生を担当しているので、使用されている文法や内容はある程度高度なものになっています。私は通常、文法を扱う部分と本文を扱う部分を切り離して授業を組み立てています。最初に文法の導入をして、その文法を理解した上で、今度はその知識を活用して本文の内容が理解できるかどうかという段階に入ります。

ができればと思います。

考えてみれば、日本の英語教育における「教科書本文」というものは、あまりに当たり前の存在として常にそこにあったので、あまり問題意識を持ってその存在自体を問い直すようなことは、これまでなされなかったのではないのでしょうか。そのため、それを授業の中にどう取り込み、どのように使うのかとい

本文の内容理解をする上で、まず必ず行うことは、オーラル・イントロダクションです。そのあとに生徒たちに様々なタスクを課し、内容を深く理解させます。そして、音読を繰り返し行います。最終的に、本文をモデルとして題材内容にからめた英作文をさせ、そこで習ったばかりの文法を使った自己表現活動に広げるような活動をすることもあります。そのほかにも、既習の本文を使って帯活動としてラスト・センテンス・ディクテーションをしたり、授業外の時間を使って、音読のリーディング・

う点に関しては、あまり明確な指針がなく、ある意味では授業者任せになっていたように思います。今回は新学習指導要領が発表されるタイミングでもあるので、改めて「教科書本文」というものについて問い直し、英語教育にとって「本文とは何か」という根本的な問いを柱として、様々なご意見を伺いたいと思います。

マラソンをしたりと、教科書の本文は手を替え品を替え、繰り返し活用しています。

高橋 本文に入るときに、導入で工夫していることなどはありますか。

伊地知 オーラル・イントロダクションで本文を導入する際には、題材に関する資料を集めたり、関連するビデオを用意したりするなど、生徒が題材内容に入りやすいように工夫しています。どうしても資料が集まらなかったり、納得いくピクチャー・カードが手元になかったりするときには自分でオーラル・イン

トロダクションに使用する絵を描くこともしばしばありますね。

山本 私の場合、教科書本文を使って、軸になる活動を3つ設定しています。1つはオーラル・イントロダクション、もう1つは音読指導、最後はオーラル・プレゼンテーションと呼んでいる、本文内容のリテリング活動です。

まずオーラル・イントロダクションですが、これはほとんどの場合、生徒とのやり取りを含んだインタラクションの形になります。次に音読の指導ですが、正確な発音だけでなく、場面に応じた音読も意識させます。目標を定め、それを音読テストで評価します。最後のオーラル・プレゼンテーションですが、ちょうど教師がオーラル・イントロダクションをするように、生徒がクラスの前に立ち、ピクチャー・カードを使用しながら本文内容について発表する活動です。このとき本文内容に加えて、自分の考えを表現したり聞き手に質問を投げかけたりする部分を入れることで、表現力だけでなく、本文の内容理解がきちんと行われているかの確認もできます。

このほかの細かい活動としては、語彙や文法の小テスト、ディクテーションなどもやっていますし、家庭での音読などもさせており、これが最終的には暗唱するところまでつながっています。

高橋 内容を理解して終わりということではなく、本文についての最終的な出口となるのは、オー

ラル・プレゼンテーションをしたり、暗唱をしたりという発表活動になるということですね。

山本 その通りです。逆説的ですが、「読めるけれども意味がわかっていない」ということもあり得ます。音読ができていたり、日本語に訳すことができていたとしても、本当の意味が理解できていないということですから。オーラル・プレゼンテーションで人に説明するとなると、本当の意味が理解できていることが必須となりますので、ごまかしはききません。一目瞭然です。

高橋 本当の意味が理解できるということが非常に重要になってくると思いますが、そのための手だてとしてどんな工夫をされていますか。

山本 文字以外の情報をしっかりと使うことでしょうか。教科書本文の優れている点は、場面がしっかりしていることだと思います。場面を表すイラストや映像資料などをうまく使って、意味を取る際の手助けとしています。

ただし、最初からすべてを理解しなければいけないとは思っていません。はじめにすべてを与えてしまうのではなく、はっきりしない部分を残しておいてもいいのだと思っています。本文に何度も関わりながら、語彙や文法が身についたり、音声の指導を受けたりする過程で、同時進行で意味の理解が深まっていくような形でいいのではないのでしょうか。

高橋 本文にかける時間はどのくらいですか。

山本 だいたい授業の3分の2くらいは使っていると思います。

高橋 室井先生は中学校や高等学校で教壇に立った経験をお持ちですが。

室井 私が中学校の教壇に立っていた頃は、今のような「本文のイントロダクション」などはあまり意識していなかったと思います。その代わり、週5時間体制のおかげもあり、題材に関連していかに話を膨らませ、内容のおもしろさをいかに伝えるかに一生懸命であったように思います。当時 *NEW CROWN* を使っていたのですが、当時からアリスのシリーズが載っていて、作者や作品についての話をしたり、ハンプティ・ダンプティにちなんでゆで卵に絵を描いてコンテストをしたり、ゆとりがありました。本文がすべてであり、本文のおもしろさを何とかして伝えることが教師の使命だと思っていましたし、それが楽しかったのを覚えています。ただし、当時は英語によるインプットなどは考えていなかったもので、すべて日本語で話していたのは今思えばもったいなかったかもしれません。

今では、音読の大切さを実感しながら教えています。音読のモデルを示すときには、生徒の知りたいという気持ちを引き出すために、内容に感心して「ほー」「へえ」などと言ってみせるだけでも違いが出ると思います。また、生徒にとっては不慣れな言

IJICHI
KANANEGISHI
MASASHIMURROI
MICHIKOYAMAMOTO
TAKAOTAKAHASHI
SADAO

語である英語の音は、はじめはできるだけゆっくり読んで聞かせてあげないと、リピートするのが不安であり、英語らしい発音のまねをするのは気恥ずかしいものでしょう。ですから私は、はじめはゆっくりと、徐々に速く、3段階くらいのスピードでともに読むようにしています。

音読のテストも実施していますが、年に1度でもテストがあると、普段から音読をおろそ

かにしないという姿勢が生徒の中にできるようです。音読するときにはセンス・グループを意識させ、最終的には自分のことばを発するように音声が出せれば、読むことが話すことにつながっていくと思います。

高橋 本文はすべての中心であり、そこからいかに展開するかが、英語教育そのものであるというような観点があったと思います。先生方の話を伺って、い

わゆるリーディング・スキルをはじめとする英語のスキルという意識が出てきたのはいつ頃だったかと考えさせられました。今では、一方で本文の題材内容そのものの価値があり、一方で英語のスキルを高めることがあります。その両方に深く関わる本文ですが、その両者のつながりにこそ、本文の現代的な役割が見えてくるような気がします。

本文にふさわしい英文とは

高橋 根岸先生は指導的な立場から中学校現場をご覧になっており、また教科書のづくり手としても本文に関するお考えをお持ちですので、その両面からお話いただけますでしょうか。

根岸 私は以前に勤務した県立高校と高等専門学校（高専）で、検定教科書を使って教えた経験があります。一方、高専の4年次と5年次は短大相当ということで、検定教科書ではなく、当時浸透し始めていたコミュニケーション・アプローチの理論にもとづいた教材を使っていたのですが、本物の新聞やパンフ

レットなどが掲載されていて、オーセンティックな読み物が豊富でした。それらと比較してみると、検定教科書に載っている本文というものは、いったい何なんだろうという思いを抱くようになりました。本文とは、教科書のためだけに誰かが書いた文章であり、改めて見ると、教科書以外の現実の世界にはない種類の文章です。これはとても、何というか、おもしろくて不思議な存在だなと。日本の英語教育には欠かせない存在なのですが、読み手は学習者でしかなく、学習者のために、英語を勉強するために書かれた文章というのは、実はかなり特殊なのではないかと。

もうひとつは、初級者向けのケンブリッジ英検の作成に携わっていたときに感じたことですが、初級であるにもかかわらず、新聞やチケットなどのオーセンティックな素材を使うように指示されるのです。いわゆる教科書本文のようなものは出て

こないのですね。それと時期を同じくして、東京都中学校英語教育研究会（都中英研）が作成しているコミュニケーションテストにも携わりました。会議でリーディングの問題を持ち寄るのですが、リーディングの素材なのに会話文が多いんですね。確かに教科書の本文には会話文が多いので、先生方にはあまり違和感がなかったようなのですが、そもそもの私の疑問は「会話文って、読むものだろうか」ということなんです。これについては都中英研でも議論し、それ以降は「読むべきものを読ませる」ようになりました。会話文を日常的に読むことはあまりありませんので、リーディングの素材には適さないという考え方です。

このようなコミュニケーション・テストの考え方に立って見たときに、会話文とはいったい何者なのでしょう。授業ではどのように使われているのでしょうか。読解の対象と

PROFILE



根岸雅史

東京外国語大学教授。専門は英語教育学・言語テスト。現在、日本言語テスト学会・英語運用能力評価協会の理事。著書に『コミュニケーション・テストへの挑戦』（三省堂）、『テストの作り方』（研究社出版）ほか。

することが妥当なのでしょう。様々な疑問が浮かんできません。これらの疑問は現在でも私の頭の中にあります。

このような本文の背景には、本文を覚えれば英語力が伸びるというようなロジックがあるのではないかと思うのですが、果たしてそうなのでしょうか。確かにそれで伸びる力があることは事実でしょう。しかしモデル文の暗唱が、自由な発話をする能力につながるのでしょうか。日本の英語教育では、「覚える」と「使う」を比べたときに、「覚える」部分に重きを置いて、「使う」練習は学習者に任されているように感じることがあります。本文を覚えることも大切でしょうが、それだけでは英語を「使う」という視点が弱くなるのではないかと思います。

高橋 本文とはいったい何者なのか、特に会話文の本文はどういった存在なのか、という根源的な問いですね。会話文の教科書本文が増えています。これは音読したり暗唱したりすべきものなのか。あるいは、本文という存在は本当に必要不可欠なのだろうか。そういった点が気になります。

本文を軸にした授業の組み立て

高橋 次に、授業の流れの中で本文をいつ扱うのかということをお聞きします。先ほど授業時間の3分の2程度は本文がらみの活動に費やしているという山本先生のお話がありました。他の先生方はいかがでしょうか。

室井 会話文に関しては、高校の場合、オーラル・コミュニケーションの教科書と英語Ⅰや英語Ⅱの教科書では事情がまったく違います。後者には会話文がほとんどありません。そのような教科書を使ってみて思ったのですが、会話文には授業の中でそれなりの役割があるのですね。本文をペアで音読させやすいので、場面設定にバリエーションを与えたりなどしながら教科書を楽しくペアワークに発展させることができます。もちろん、会話文があるからコミュニケーションだと思えるのは安直すぎるとは思います。

山本 私は先ほど申しましたように、オーラル・プレゼンテーション活動を軸のひとつとしていますが、会話文の内容をプレゼンテーションで伝えるとなると、やはりそのまま暗唱というわけにはいかないので、当然内容を言い換える、いわゆるリプロダクションをすることになります。会話文の情報をまとめなおしてプレゼンテーションすることです。また、その中に自己表現も入れるように指導していますので、生徒が必要とすれば、中学1年生でも現

PROFILE



山本崇雄

都立両国高等学校附属中学校教諭。英語劇を頂点としたトップダウンの英語授業を目指す。著書に『中学生の楽しい英語劇』（秀文館・共著）、「都立中高一貫教育校一期生の進む道」『英語教育4月号（2007）』（大修館書店）ほか。

在完了形を使わせるようなこともあります。そのような活動を積み重ねていくうちに、He said ..., I think ..., I agree with him. などの表現が自分のことばとして使えるようになり、やがてスピーチやディスカッション、ディベートなどをする力になっていくと思います。簡単に身につくものではありませんが、3年間かけて型を教えていけば、自己表現力が鍛えられます。教科書を読むことだけで終わらせず、読んだ先に何があるのかということを示してあげることが必要だと思います。

高橋 教科書本文をレセプティブな扱いだけで終わらせるのではなく、そのあとに行う自己表現活動のための素材と位置づけるということがよくわかりました。

どのような活動から入って、どのような順を追って授業を組み立てていくのでしょうか。

伊地知 私も3分の2くらいの時間は使っていると思います。会話文が読み物かによって扱いは変えていますが、まずはオー

ラル・イントロダクションから入って、内容に入っていくための様々な手がかりを与えます。内容理解が済んだあとは、私も自己表現まで持っていくようにしています。また、本文に直結してはいませんが、チャット活

PROFILE



伊地知可奈

東京都練馬区立八坂中学校教諭。東京都中学校英語教育研究会調査部員として都中英研コミュニケーションテスト作成に携わっている。平成16年度東京都教育研究員。平成18年度東京教師道場部員。練馬区学力調査委員。

動もさせています。この活動は、だいたい1年生の後半くらいから始まります。この中で、本文に出てきた既習の会話表現や文法などを自己表現につなげられたのではないかと思います。

本文には、自己表現のための素材を提供するという役割もありますが、私は内容面も重視していると強く感じます。近年、戦争や人権について子どもたちに知らせたり考えさせたりする機会は、少なくなってきたのではないかと感じています。そのようなことを英語の教科書を通して学ぶことができるのは、とても素晴らしいことだと思います。教科書から英語だけではなく、国際理解を踏まえた歴史や文化を学習させることも本文の大切な役割ではないかと思っています。

高橋 本文には、言語材料などの素材提供ということ以外に、

子どもたちを学びに向かわせるという役割もあるというお話ですね。

山本先生も伊地知先生も本文を重視して、それ相応の時間を割いているということですが、中には言語の運用を重視した活動ばかり行って、教科書はほとんど扱わないという先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。

伊地知 私が初任の頃の話ですが、教科書を一切使わずに、自分のプリントしか使わないという先生もいらっしゃいました。当時はそういうやり方もあるのだと思っていました。

根岸 最近でもそういった授業スタイルの先生はいらっしゃると思います。授業の終了間際に、5分くらいで本文をざっと流すというようなやり方ですね。生徒の立場に立ってみると、不安になるのではないかと思います。

室井 そのような扱い方では、本文の内容を広げたり深めたりといった余裕は一切ないでしょうね。

高橋 室井先生の授業スタイルでは、どのくらいの時間を使って、どういう順序で本文に向かっていきますか。

室井 私は授業時間の5分の4くらいの時間を本文関係に使っていると思いますので、その意

味で教科書本文にとっても依拠していると言えるかもしれません。本文には、書いた人の願い、伝えたいことが詰まっていると思います。スキルとしての英語はもちろん大事で、それを軽視するつもりはありませんが、スキルとメッセージは車の両輪のようにどちらも大切だと思います。月日がたち、たとえ英語というものを忘れてしまったとしても、その人の中に残っている何かがあるということが、大事なのではないのでしょうか。

高橋 教育とは、知識を忘れたあとに残るもの、ということばを思い出しました。

本文を扱う前後には、どのような活動をしていますか。

室井 導入には、時事的な話題の中から本文の内容に関連したものを扱って、生徒の興味を高めるようにしています。そんな中から、生徒のクリティカルに考える力を伸ばしていければと思います。一方、先生方のお話を伺って、私の授業には出口の部分がないと反省しました。プレゼンテーションにつなげるなど、時間があれば取り組みたいところです。テストでは本文の内容に関連したことを書かせたりしていますが、そこで生徒の思いや個性が出るかと思っています。

本文の役割とは

根岸 非常に興味深いのは、本文の役割に、大きく分けて「内容」に属する部分と「スキル」に属する部分の2つがあるとい

う点ですね。本文は、内容やメッセージを伝えるためにあるのか、それとも言語材料を教えるためにあるのか。

海外のコースブックや検定試験などでは、そこに載っている読み物は「スキル」のためのものなので、文章は置き換え可能で

す。たとえば英字新聞の記事が載っているとして、同じようなスキルを扱えるのであれば、次の日の記事と置き換えたとしても何の支障もありません。ところが日本の教科書ではそうはいきません。「内容」こそが重視されるので、文章を置き換えてしまうことはできないのですね。

実はこのことが、日本におけるテストからいわゆる「総合問題」がなかなかなくなることに深く結びついているのではないかと思います。本文が置き換え可能であれば、テストの際には教科書本文とは別の文章を持ってきてスキルの試験を行えばいいわけです。しかし、置き換え可能でない場合には、別の話を持ってきてテストをつくるわけにはいかないのです。内容的な部分は、スキルのように本文から切り離して扱うことができないので、いわば本文と一体であり、不可分なのです。

このように本文の役割には2つの面があり、それによっていろいろ縛られているところがあるように思えます。

室井 おっしゃる通りだと思います。私はその2つの役割が

あることこそが教科書の素晴らしさでもあると思います。TOEIC対策などで高度にプラクティカルなものを読ませることもあるのですが、そこには生徒の心に響いてくるような内容はありません。リーディング・スキルを伸ばすことは重要ですが、生徒の精神的な発達段階を考えると、無味乾燥なものを読むだけで勉強が終わってしまっただけは寂しいと思います。両方を求めつつプラクティカルな力を伸ばすことも可能だと思いますし、それが教科書の役割なのではないでしょうか。

根岸 その点には賛成です。英語教育がそこまで引き受けられるかどうかという議論はあると思いますが、個人的にはスキルもメッセージも、どちらも重要であると思います。

ひとつ気になるのは、メッセージ性のようなものが全体にわたって必要なのか、いわゆる新出の文法事項を導入するような際にもメッセージ性が必要なのかどうかという点です。たとえばThis is ～. を初めて導入する際に、内容的なメッセージを込めることが必要でしょうか。

室井 そうなると、味の濃い食べ物みたいで、生徒にはしんどいかもしれませんね。そのような際には、文法事項を理解することにフォーカスして、わかりやすく料理してあげることを優先し、メッセージ性は抑えるような発想が必要なのかもしれません。

高橋 教科書本文の2つの役割が浮かび上がってきました。Skill-based Language Teachingの立場とContent-based Language Teachingの立場、それぞれが重視する部分であると思いますが、後半ではその両方を重視する立場から、本文に望むことを探っていきしたいと思います。

PROFILE



室井美稚子

清泉女学院大学教授。専門は異文化間理解・英語教育学。中部地区英語教育学会所属。「わかる楽しい授業」を目指して、中学校・高校・高専に長年勤務。検定教科書およびアジアの教科書を研究中。『新しい英語の学び方・教え方』（ロングマン、共訳）『WHAT'S UP?』（桐原書店）ほか。

リーディング・スキルを伸ばすには

高橋 4技能を考えたとき、本文は「読むこと」に最も関係が深いですね。しかし、読むことの「オーセンティシティー」ということが、これまであまり追求されてこなかったのではないのでしょうか。つまり、教科書本文の読みが、実生活で新聞や手紙

を読むということにどうつながっていくのかが、あまり見えてこなかった。たとえば「会話を読む」ということが、どう実生活につながるのかがわかりにくいのですね。

しかしこのことは、本文が複合的な役割を担ってきたという

ことでもあると思います。新学習指導要領でも、基礎的な知識・技能の習得ということが謳われていますが、教科書本文を使っていかに基礎的な知識・技能を身につけさせるかということも重要です。これは読むことに限らず、すべての技能における基



IJICHI KANA



NEGISHI MASASHI



MURROI MICHIKO



YAMAMOTO TAKAO



TAKAHASHI SADAO

PROFILE



高橋 貞雄

玉川大学教授。専門は応用言語学・英語教育学。言語習得論、教授方法論、外国語教材論などに特に力を入れている。現在、大学英語教育学会（JACET）の理事としても活躍中。著書に『ロングマン応用言語学用語辞典』（南雲堂）、『外国語の教え方』（玉川大学出版部）ほか。

礎基本ということになります。

伊地知 4技能の力を培うには、教科書の本文はとても大切だと思っています。本文をきちんと読み砕いて、生徒自身がひとりで読めるようになり、声に出して読めるようになり、最終的には、その内容についての考えや本文の表現を用い、自己表現できるところにまでつなげていきたいと考えています。本文の役割は、読むことにとどまらず、聞くこと、書くことや話すことにまで広がっていくものだと思います。

高橋 こうしてみると、いわゆる題材内容は別としても、教科書本文には様相の異なる2つの役割があるように思います。1つは、すべての技能の根本となるような基礎基本を身につけるための素材の提供。もう1つは、純粋に読む材料として、読む技能を高めるための素材としての役割です。どちらかというと、後者の役割に関する意識が、これまでの中学校の教科書では希薄であったように思いますが、いかがでしょうか。あるまとまったパラグラフがあった

とき、どうやったらそれが読めるようになるのか、いわゆるリーディング・スキルのようなものの指導には、本文は使われているのでしょうか。

伊地知 明示的にリーディング・スキルの指導をしているわけではありませんが、読むときにはタスクを与え、目的を持たせるようにしています。本文を扱うときには、最初にオーラル・イントロダクションをしてからサイレント・リーディングをさせるのですが、その際には必ずポイントとなる部分に関するリーディング・タスクを与え、答えを探しながら読ませるようにしています。

山本 私は特に読むことの指導において、critical thinkingの方法を身につけることが大切だと思っていますが、教科書本文にはやや物足りなさを感じています。それに比べると絵本の持つ魅力は大きく、生徒は、絵本を与えれば、1時間でも黙々と読みふけります。教科書ではなかなかそうはいきません。先を読みたいという気持ちをつくり出すしかけに違いがあるのでしょうか。たとえば『おさるのジョージ』であれば、彼のどんなところがcuriousなのかという部分が軸になって、それを立証する出来事が展開していきます。読みながらしっかりした論拠を拾っていき、クリティカルな読みができるようになっていきます。それが自己表現をするときにも生きてきます。教科書にもそのようなしかけがある

と嬉しいのですが。

高橋 読むこと以外の技能に関して、英語の基礎基本を身につけるという点においては、本文の役割をどう捉えていますか。

山本 非常に重要だと思います。教科書は誰もが持っている唯一の教材です。授業を何回か欠席してしまった生徒でも、教科書を使って家で学習すればカバーできるような、そんなものになればいいと思っています。

高橋 室井先生は、先ほど本文のメッセージ性が非常に重要だというお話でしたが、一方で生徒の英語の基礎力を育てるという点については、本文の役割をどのようにお考えですか。

室井 私は、たとえば英語を習ったときに、文法が内在化され自動化され、英語のスキルが自分のものとなっていくことはとても重要だと思います。内容ばかり追い求めてもだめで、英語がわかるようになる喜び、達成感、self-esteemの高まりも大切にしたい。先ほども申しましたが、教科書は内容かスキルのどちらかを求めればよいものではなく、内容とスキルの融合を目指すものではないでしょうか。

リーディング・スキルについては、大仰に構えず、書いた人が一番言いたいことはどこにあるかを探させたり、“but”のあとには本当に言いたいことがくるよとか、そういった読み方を身につけられるように意識しています。読み方が身につくとなると、自分が書くときにも応用できるようになりますので、そ

ういう発信の部分も目指したいところですよ。

暗唱の先にあるもの

高橋 中学校の教科書は、いわゆる multi-layered syllabus ということで、様々な観点が盛り込まれていますね。したがって、本文の中にも様々なものが盛り込まれることになるわけです。新出文法事項や新出語彙などの言語材料も提示しなければならぬし、環境問題や人権など、生徒に考えさせるための内容を持っていないといけないし、また実生活での「読む」という行為につながるような体験をさせるために、いろいろな形式の読み物に触れさせることもしなければならぬ。実に多様な役割を、本文は担っています。

根岸 新出文法事項の導入に適している本文と、メッセージを伝えるための reading passage として優れている本文とは、本来異なってしかるべきだと思いますが、今はそれらがすべて同じ本文の中に混在しているように思います。

話は変わりますが、会話を本文とした場合、たとえば間の取り方や視線の移し方など、本来会話にとって重要なはずの周辺情報が文字には表れずに捨棄されてしまうという問題があります。会話を指導するときに

は、これらを補ってあげる必要があるのですが、うっかりすると見落としてしまうことになり、注意が必要です。

指導についてもうひとつ思うのは、本文は暗唱できるまで徹底的に身につけさせるということが非常に重視されているということです。これは果たして妥当なのでしょうか。本文は高度に限定された文脈の中での例であり、数多く覚えたところでそれをびったりそのまま使えるような状況に出会うことはほとんどありません。暗唱ばかりに時間を費やして、実際に使ってみる練習をしないのは、いわば素振りばかりをして試合形式の練習をしないようなもので、一番大切なトレーニングが欠けているように思います。このような指導のやり方と、本文の担ってきた中心的なステイタスとは、実は深く関わっているように思います。

室井 本文を暗記することが最良と信じてやってきたけれども、実はそれだけでは英語ができるようにはならないことがわかってきた。それが批判もされている。しかし我々は、それに代わる方法が見つけれられてい

ないので、相変わらず古いやり方に頼り続けている、ということでしょうか。しかもそこに、本文の内容的価値まで入れようとしている、という。

根岸 概ねそういうことですが、ひとつだけ違うと思うのは、まだ多くの人たちは、暗記による学習がだめだったとは思っていないのではないかということです。多くを暗記してそれを自動化できれば、いつか自分の口から自分のオリジナルのメッセージが出てくるのだと信じているようなところがあるのではないのでしょうか。

高橋 暗唱ばかりを追い求め、あたかも暗唱こそが最終目標であるかのようなやり方に対する疑問の投げかけですね。audio-lingual の時代には、よく文レベルの暗唱をやりました。暗唱することがいつか自己表現につながるのではないかという思いがあるわけですが、それは型の練習にすぎないのではないか、型をいくら覚えても、それを自分のものとして応用できるような練習をしなければ表現にはつながらないのではないか、という観点だと思います。

基礎基本か、題材か

高橋 本文の役割をもう一度整理しましょう。一方には、読むための素材としての本文があり、

ここには多様な形式と内容的価値が絡んでやや複雑です。もう一方には、いわば language text

としての本文があり、そこには学習すべき文法事項や語彙・表現などが盛り込まれています。



IJICHI
KANA



NEGISHI
MASASHI



MUROI
MICHIKO



YAMAMOTO
TAKAO



TAKAHASHI
SADAO

これらをうまく活用すると英語が使えるようになる。その材料を提供するための本文ですから、ここにはあまり感動などを求めなくてもいいのではないかと、言語の力さえ伸びればいいのではないかと、という考え方です。根岸先生のおっしゃる「置き換えのきく」文章ということにもなるでしょう。あるいは生徒の表現レベルに合った、自己表現のモデルとしての文章ということにもなるでしょう。あまり高度な文章だと生徒には使いこなせないわけですから、話題などにも配慮が必要です。

伊地知 先生方のお話を聞いていると、あらためて、教科書の本文はすごいな、様々な要求を満たせるように、手塩にかけてつくられたんだと思いますね。

高橋 ある意味では、役割が詰まりすぎているという感じもあります。

伊地知 置き換え可能な文章としての本文という考え方もあります。生徒は内容と表現を結びつけて覚えていることが多いので、印象に残らないような内容では、表現も身についていけないのでは、と思うこともあります。どうでしょうか。

高橋 内容面でのとっかかりがあれば、文脈に依拠した形で表現が定着するということですね。

山本 以前に副教材として使用したものに、英文は豊富だけれども内容がつまらないというものがありました。生徒の自己表現に適したモデルは豊富なのですが、実際に自己表現活動をさ

せてみると、おもしろみがなくて生徒の充実感が得られませんでした。確かに内容が充実していればいるほど苦労は多いのですが、苦労してでも自分で発したいと思った英語は定着率がよく、卒業しても生徒の記憶に残っているものです。簡単に自分のことに置き換えられたり、日常場面ですぐに使えるようなことが定着につながるわけではありません。もちろんそのような練習も必要ですが、それは教科書に求めるのではなく、副教材を使うなどして教員が補えばいいことだと思います。

高橋 基礎的な練習も必要であり、一方で生徒の感性に訴える内容も必要である、ということですね。その両方が英語力につながっていくという。

読み物としての内容の重要性という点については、室井先生もおっしゃっていましたが。

室井 大学生を相手に、心に残っている英語教科書の内容についてアンケートを行ったら、複数名から *NEW CROWN 3* に掲載の “A Vulture and a Child” があがりました。世界の現実について考えるきっかけになったという感想もありました。教材の持つ力と、若い心のやさしさに感動したのを覚えています。教師は週に十数時間も同じ教材を扱い、準備時間にもそのことを考えているので、深刻な内容を扱うことがしんどく感じられるものです。しかし、生徒にとっては、週に3回くらいはしっかりした内容の文章

と向き合う時間があったてもいいのではないかと思います。

一方の英語の基礎力の部分ですが、なんとかして内容のよさと両立させたいところです。たとえば最上級の練習をさせるときに、“... is the most important.” のような空所を補充させると、money などと書く生徒は少なく、peace などと書いてくれるものです。そんな形で英語力と内容が融合できることを求めているいきたいですね。おそらく相当高度な要求を教科書に課していることになるのでしょうか。なおかつ、出だしから内容面での負荷を高くするのではなく、わかりやすい入り口を用意して、徐々に内容面を深め、最終的に自分の言いたいことが生まれてくるような設計だと素晴らしいと思います。

高橋 最初は負荷がかからないように、ということですね。いきなり真剣勝負に放り込むのではなく、身近な用例から導入してあげるということでしょうか。その発想は大切だと思います。本文にあまりに思いが詰まっていて、難しくなっているという状況があるならば、本文の役割から再考してみる必要があるのではないかとということです。

根岸 新出項目を学ぶときの内容面の負荷の話としては、先ほどの Vulture に好例があります。新出項目は want が目的語と to 不定詞を従える文型ですが、本文の該当箇所は He wanted the world to see the

IJICHI
KANANEGISHI
MASASHIMURROI
MICHIKOYAMAMOTO
TAKAOTAKAHASHI
SADAO

problems of Sudan. です。かなりメッセージ性が高いですね。一方、基本文としてあげられているのは Tom wanted me to take pictures. です。こちらのほうが生徒の言語的な身の丈には適しているのではないかと思います。

私の中でまだ答えが出ていないのですが、印象に残るということと習得の間には、どのくらいの関連があるのでしょうか。

教科書本文に望むこと

高橋 最後に、様々なジャンルの読み物に触れる体験を与えるために、中学校の教科書本文に期待するところがあればお伺いします。

伊地知 私は都中英研のコミュニケーションテスト作成に関わらせていただいているのですが、コミュニケーションという点から、読ませるときにも実際にあり得る場面を想定することが大切だと感じるようになりました。手紙を読むにしても、新聞を読むにしても、生徒が今後実生活の中で英語に触れたときに、そういえば教科書の中でもこういうものを読んだなと実感できるような体験をさせたいですね。そのためには、深く読ませる内容のものとともに、ある程度オーセンティックな内容もあったほうが良いと思います。

山本 読むという営み考えたときに、必ずそこには何のために読むのかという目的がありますね。新しい情報を得るためだったり、純粋に楽しむため

エピソードが記憶に残ってはいけるけれど、そこで身につけるべき事項を使って文をつくることはできない、つまり習得できていないというようなこともあるのではないかなと。メッセージ性の強い内容は記憶に残りますが、それと習得とは別のこととして考えたほうがよいのかもしれません。一方で、インパクトの強い文と出会えばそれが身になり、習得につながるというこ

だったり、あるいは強いメッセージ性のあるものを読んで見識を高めたり、感動したり。いろいろあると思います。教科書の中で、そのバランスが取れているといいと思います。

高橋 一口に本文といっても、読む目的を明確にして、それに応じた本文をつくっていく必要があるということですね。

根岸 リーディングの問題を作成するときでも、誰が、どんな場所で、どんな目的で読むのかということを考えていくと、実生活で出会うような自然な文章に近づいていきます。そういった教材をつくるには、作り手が豊富な経験を持ちつつ、生徒にとってはどのような体験が現実的なのか、生徒は実生活の中でどんな物を読んでいるのかということに敏感になっている必要があると思います。生徒が実生活で英語を読むことはまだ少ないでしょうが、日本語で読んでいるジャンルの読み物を把握した上でその英語版を見せてあ

とも否定はできないので、まだ悩んでいるところです。

高橋 泳ぎ方を教えるとき、昔は水の中に放り込んだものですが、今は違いますね。段階を追って技術を教え、到達目標をつくり、学び方のプロセスを示す時代です。そのような時代に、これまでのようにいきなり真剣勝負の本文でよいのだろうかという疑問は、共有できていると思います。

げれば、生徒の目が実際の英語に向かっていきやすいでしょう。現状では教科書の本文という存在が、教科書の外にある実際の世界とつながっていないため、教科書内だけで学習が完結してしまい、実生活に結びついていけないことがあるのではないのでしょうか。レシピがあったり、時刻表があったり、実際に読む物に応じたような多様性が教科書の中に入ってくれば、生徒が教科書以外でも英語を読み始めるきっかけになるかもしれません。

高橋 本文が何のためにあるのかという問いは、これまで正面から取り組んだことがあまりなかったと思います。容易に結論がでるような問いではありませんが、今日は多くの示唆をいただきました。これからも引き続いて、本文とは何か、どうあるべきかを、子どもたちの視点を忘れずに考えていきたいと思っています。本日はありがとうございました。(2008年1月)